

インド論理学研究 第IX号  
平成28年11月30日 発行 拠刷

*Nyāyakalikā* 結語再考

片岡 啓

# *Nyāyakalikā* 結語再考\*

片岡 啓

## 1. 序

1995年10月に始まるインド留学の前から、インド旅行の折には図書館を訪れ写本をコピーしていた。ケーララ大学の写本図書館を訪れたのもずいぶん前になる。ミーマーンサー写本と並んで力を入れてきたのがジャヤンタの著作である。一番思い出深いのがラクナウの Akhila Bhāratīya Saṃskṛt Pariṣad が所蔵していた『ニヤーヤ・マンジャリー』のシャーラダー文字写本である。ポンディシェリで知遇を得たドミニク・グッドールからシャーラダー写本の優秀さを聞いていたこともあって、初めて手にしたシャーラダー写本に心躍らせたものである。ミーマーンサーを専門の核とする筆者にとって、実は、シャーラダー写本は余り縁がない。というのも、カシミールは、ミーマーンサー写本を余り残していないからである。伝統がなかったのである。ミーマーンサーの伝統ということから言えば、むしろ、南インド写本にお世話になることになる。すばらしい読みを有するカリカット写本（マラヤーラム文字）との出会いは、その後の筆者の研究方向を強く規定することになる。2003年に『東洋文化研究所紀要』144号に掲載した“Critical Edition of the *Vijñānādvaitavāda* Section of Bhaṭṭa Jayanta's *Nyāyamañjarī*”以来、断続的に作業を続けている。

小品『ニヤーヤ・カリカー』についても、長らく写本を蒐集してきた。私の後にインド留学に出た護山真也氏がベナレスに旅行すると聞いて、あれこれとお願いをしたのを思い出す。プーナの BORI 写本も、氏の協力によるものである。氏が交換留学で行ったのは、当時まだ東大文学部との協定があったデリー大。しかし行ってみると用意された寮の部屋は、インド人が誰も住まないトイレの真横。日本に帰っていた私も、旅行の折に氏の様子を見に行ったことがある。半分倉庫のような暗くて汚い（そして臭い）部屋である。デリーを飛び出してベナレスやプーナに氏が出かけ、そして、貴重な写本土産を持って帰ってくれる遠因となったのは、間違いなくこの臭い部屋である。筆者としてはデリー大の配慮にむしろ感謝したい。その成果は2013年に『東洋文化研究所紀要』163号に“A Critical Edition of Bhaṭṭa Jayanta's *Nyāyakalikā* (Part 1)”として出版した。7写本（うち3写本がシャーラダー文字）を使用した校訂本である。写本の数が多く大変な作業だったため、まだ前半部しか終えていない。

---

\* 助言を受けた Somdev Vasudeva と渡辺俊和に感謝する。

さて、本稿で取り上げるのは、この小品『ニヤーヤ・カリカー』の結部である。まず簡潔に研究史を振り返っておく。

### 1.1. ジャー校訂本における結部の読み

問題となる結部は、最初の校訂 (editio princeps) であるガンガーナータ・ジャーの校訂本 (1925 年刊) において次のように記されている。

इत्येतद + + + +  
पोदशपदार्थतत्त्वं बालव्युत्पत्तये कथितम् ।  
अजातरसनिष्ठन्दमनभिव्यक्तसौरभम् ।  
न्यायस्य कलिकामात्रं जयन्तः पर्यदीदृशत् ॥  
समाप्तेयं न्यायकलिका ॥  
शुभमस्तु ।

6 行からなる問題文のうち、まず、1 行目の ity etad 云々は、プラス記号が示すように、ジャーが見た写本においてはプラス部分が欠落していたと考えられる。続いて、詩節を意図したと思われる字下げとともに 2-4 行目が引かれている。細かいことを言えば、2 と 3 とは頭が揃っているのに対して、4 行目は 1.5 字分 (nyā) ほど頭が飛び出している。しかし、これは、2-6 行目の印字を全て中央化したことに伴う結果と考えられる。現に 4 行目の最後にはダブルダンダが置かれている。つまり、3-4 行目が一組の詩節 (シュローカ) であることをジャーは明確化しているのである。いっぽう 2 行目は、アーリヤー韻律詩節の後半部 (12+15) である。ダブルダンダは置いてないにせよ、字下げからすると、これが詩節の一部であることをジャーは捉えていたと思われる。「このニヤーヤ・カリカーが終了。幸あれかし」という最後の 5-6 行目 (奥書、コロフォン) は、結部によく見られる表現である。この類の終了明示の表現は写本によって異なることが多い。著作自体に帰属するものではなく、写本を書写した人が書いたものであるとするのが一般的な見方であろう。実際に後で我々はそれを写本に確認することになる。

### 1.2. Marui 2000

Marui 2000:94 は、この結部の 1-4 行目を、ジャーのエディションから引用する。

*ity etad + + + +  
 sodaśapadārthatattvam bālavyutpattaye/  
 ajātarasaniṣyandam anabhivyaktasaurabham/  
 nyāyasya kalikāmātram jayantah paryadīdrśat//*  
 (It is not clear what the series of the symbols ‘+’ stands for.)

後に Dezső 2004 が指摘するように、2行目末の kathitam が Marui 2000 の引用では抜け落ちている。ただし英語版の元となった丸井 1996 では kathitam がある。また1行目の欠落部分に関しては英語版と同様、「++の記号は版本の通り。ただし何を意味するかは不明」(丸井 1996:344(8))と記されている。後に丸井 2014:60, n.79 は「記号“++”は版本の元となった写本に脱落があったことを示していると思われる。ただし版本にはその記号説明はなく、そもそも使用写本についての説明が全くない。」と記している。

本稿では、この結部に意識を集中して問題点を洗い出す。特に、結部のシュローカの直前に位置する（アーリヤー詩節とおぼしき）1-2行目に関して取り上げる。この欠落部分については、Dezső 2004 と Marui 2008 とが既に写本を用いた原文再構成を行っている。本稿ではその再検証を中心に結部を見直す。

## 2. アーリヤー詩節の異読

『ニヤーヤ・カリカー』の著者問題を正面から取り上げて論じる Marui 2000 は、ジャーのエディションに依拠してこの結部（1-4行目）を引用する。いっぽう『アーガマ・ダンバラ』への解題の脚注において Marui 2000 に言及する Dezső 2004:vii-viii, n.17 は、一写本を参照することでジャー校訂本の欠落部を埋め、結語全体（1-4行目）を再構成する修正案を提示する。関係箇所を抽出すると以下の通りである<sup>1</sup>。

of the *Nyāyakalikā*, which contain a lacuna in the edition. With the help of the BHU MS we can complete and improve the text: \*ity etad aprabhāvitasmatabhedam akṛtāparamatākṣepam (conj. : ity apramāvita<sup>o</sup> MS, ity etad + + + + ed.) sodaśapadārtha\*tattvam (ed. : °tattvām MS) \*bālavyutpattaye (ed. : vālavyupattaye MS) \*kathitam| (MS : om. MARUI, ed.?) \*ajāta(ed. : ajñāta<sup>o</sup> MS)rasaniṣyandam anabhivyaktasaurabham| nyāyasya kalikāmātram jayantah paryadīdrśat||

Dezső 2004 の重要な指摘を受けて、Marui 2000 の改訂版を意図した Marui 2008 は、Dezső の再構成（上の1-4行目）を次のように引用する<sup>2</sup>。

<sup>1</sup> 写本における apramāvita/aprabhāvita の mā/bhā (मा と भा: 写真は後ほど 2.2.3 で掲載) については、コピーの具合で上の横線の間が埋まっているかのように見えるが、単にコピーの具合と考えられる。丸井 2014:378, n.7 が記すように写本の読みとしては aprabhāvita-として問題ないと筆者も考える。

<sup>2</sup> Marui 2008 の加筆日本語版として丸井 2014:373-417 「Nyāyamañjarī と Nyāyakalikā の対応関係——Nyāyakalikā の真贋問題を起点として」がある。丸井自身が記すように「真贋問題に関する論旨そのものはその拙論から大きく隔たるものではない」ので、本稿で別途考察することはしない。

ity etad aprabhāvitavamatabhedam akṛtaramatākṣepam śodaśapadārthatattvam bālavayutpat-  
 taye kathitam/  
 ajātarasaniṣyandam anabhivyaktasaurabham/  
 nyāyasya kalikāmātram jayantah paryadīdr̥śat//

以上からも分かるように、Dezső 2004 も Marui 2008 も、ity etad 以下の文を散文と理解している。一写本のみにもとづいて欠落部を埋める Dezső 2004において、散文と理解するのは当然の帰結である。というのも、後述するように、後半部は韻律を満たすにしても、前半部は韻律に合わないからである。文学に造詣の深い Dezső のことである、aprabhāvitavamatabhedam の部分に他に韻律を満たす異読があることを知つていれば、たちどころに気がついたであろう。あるいは、この部分についても、後半部が韻律を満たすことには既に気が付いていたのかもしれない。ともあれ、この点は、後半部の韻律に気がついていたであろうジャーから後退していると言わざるを得ない<sup>3</sup>。

いっぽう Marui 2008 は、Dezső 2004 の使用した一写本の他に四写本の情報を加え、合わせて五写本の読みを提示する。そして次のように異読を記す（Dezső の使用した写本は Ms.4）<sup>4</sup>。

Ms.1: *apratānitasvamatabhedam*

Ms.5: *apratānitanijadarśanam*

Ms.2 and Ms.3: *aprabhāvitajadarśanam*

Ms.4: *aprabhāvitavamatabhedam*

これらの異読のうち、Marui 2008 は、aprabhāvita に対して *apratānita* を採用し、さらに、Ms.1 の svamatabhedam という異読を paramata と対照的な表現として採用する。すなわち、最終的に、Ms.1 の読みである *apratānitasvamatabhedam* を採用する。すなわち、Dezső 2004 の読みに対して、写本を参照することで別の読みを採用することを提案しているのである。はたして Marui 2008 の修正案は受け入れられるものだろうか。

Dezső (Ms.4): *aprabhāvitavamatabhedam*

Marui (Ms.1): *apratānitasvamatabhedam*

<sup>3</sup> 脚注で記すように、Dezső 2004 は稀観本であるジャーの校訂本を直接参照しえず、Marui 2000 のみに依拠している。

<sup>4</sup> Ms.1 と Ms.3 はシャーラダー文字、Ms.2 と Ms.4 はカシミールのデーヴァナーガリー文字。

## 2.1. svamatabhedam か nijadarśanam か？

しかしながら、Ms.4 の読みと同様、Ms.1 の読みも破格である。12+18+12+15 モーラのアーリヤー韻律を意識して分析するならば、*aprabhāvita* と *apratānita* は同等であるが、*ta-svamatabhedam*(8) と *ta-nijadarśanam*(7) とは異なる。まず *sv* は直前の *ta* の音長を 1 から 2 に変えてしまう。また、*nijada-rśanamakṛ* が 4+4 に分かれるのに対して、*svamatabhedamakṛ* は 4+4 にならない。3+5（あるいは 5+3）になってしまふ。結局のところ、韻律を満たすのは Ms.2 と Ms.3 の *aprabhāvitajadarśanam* か、あるいは、Ms.5 の *apratānitajadarśanam*のみである。つまり、Marui 2008 の採用する Ms.1 の *apratānitasvamatabhedam* は破格なので採用し得ないのである。

なお、この一文についてジャヤンタが散文を意図していたとするのは説得力を持たない。一部を除いて完璧に韻律を満たしているからである。またさらに、韻律を満たす、内容的にも可能な異読が実際に見られるからである。わざわざ韻律を満たさない異読を選ぶ理由は見つからない。念のため韻律を *aprabhāvitajadarśanam* の読みで分析すると以下のようになる。

itye(4) tadapra(4) bhāvita(4)  
*nijada*(4) *rśanamakṛ*(4) *taparama*(4) *tākṣe*(4) *pam*(2)/  
*śoḍaśa*(4) *padārtha*(4) *tattvam*(4)  
*bāla*(4) *vyutpa*(4) *ttayeka*(4) *thitam*(3)//

## 2.2. *aprabhāvita* か *apratānita* か？

ここまでで、韻律上、*svamatabhedam* ではなく *nijadarśanam* しか採用し得ないことが明らかとなつた。残る問題は、*aprabhāvita* と *apratānita* とのいずれを採用するかということである。言い換れば、Ms.2 と Ms.3 の読みを採用するか、あるいは、Ms.5 の読みを採用するかという選択となる。写本の読みとしては、どちらがオリジナルで、どのようにして他方が派生してきたのか、ということを考えることになる。つまるところ、問題はつぎの二つの可能性に収斂する。

1. *aprabhāvitajadarśanam* → *apratānitajadarśanam*
2. *apratānitajadarśanam* → *aprabhāvitajadarśanam*

すなわち、*aprabhāvita* の後に *apratānita* が登場したという可能性 1 と、逆に、*apratānita*

の後に *aprabhāvita* が登場したという可能性 2 とである<sup>5</sup>.

### 2.2.1. 可能性 1 を支える議論

*aprabhāvita* をオリジナルと考える場合の議論は次のようなものになるはずである。まず、*apratānitanijadarśanam* は、「自身の見解を過度に詳しく繰り広げることなく」 (*apratānitaṁ nijadarśanam yathā*) という意味となる。*pratānita* は、*pratānayati* (=*prakarṣeṇa tānayati*) 「とても伸ばし広げる」の過去分詞であり、「とても伸ばし広げられた」という意味となる。自身の見解を過度に展開しないという意味である。

*apratānitanijadarśanam ... kathitam*

ニヤーヤ学派自身の見解を過度に詳述することなく……説かれた

*pratānita* や *pratānayati* という用例はジャヤンタには見えない。またジャヤンタが依拠することの多い先行文献でも稀である<sup>6</sup>。しかし、「詳述を恐れるが故に」 (*vistaratrāsāt*) という文脈での *pratanyate* はジャヤンタに用例が見える<sup>7</sup>。また先行文献でも一般的である。したがって、*pratānita* という表現それ自体は珍しいにしても、*pratanyate* で馴染みのある *pra- $\sqrt{tan}$*  からの派生として十分理解可能である。いっぽうの *prabhāvita* や、その元となる *prabhāvayati* は、ジャヤンタに他に用例が見つからない。ヴェーダでは「(ソーマなどを) 増やす」という意味が一般的である。バルトリハリでは、「露わにされた」「明らかにされた」という意味での用例がある<sup>8</sup>。いっぽう *prabhavati* は、ジャヤンタにおいては、「～ための力を有する」「～できる」という意味で頻繁に用いられる。以上を勘案すると、*prabhāvita* には意味の展開方向として三つが考えられる。

- a. 生じさせられた、作られた、出現させられた、明らかにされた
- b. 優越したもの・優勢なものとされた、力あるものとされた

<sup>5</sup>もちろん可能性としては、「X→*apratānitanijadarśanam/aprabhāvitanijadarśanam*」というように、両者の元となった第三の読み X を想定することも可能である。しかし、写本に見られる読みで韻律的に可能な読みが上の二つに限られる以上、ほかに特に強い理由がなければ、その想定は今の段階では不要である。

<sup>6</sup> ダルマキールティは、VN 67.12: *kathām pratānayan* という表現を用いている。しかし意味は「展開する」「繰り広げる」というものであり、「過度に詳述する」というニュアンスではない。

<sup>7</sup> この点については Marui 2008 (および丸井 2014:379–380) も記す。ただし *apratānitasvamatabhedam* という異読についてである。

<sup>8</sup> VP 3.6.6cd: *śaktayah khalu bhāvānām upakāraprabhāvitāḥ//* 「周知のように諸存在の能力は裨益作用により顕在化させられる。」

- c. とても生じさせられた、増やされた（→過度に詳説された）

*nijadarśana* との繋がりを考えると、c が最も相応しいと思われる。まず、ここでの「自身の見解」(*nijadarśana*) とは、*paramata*（他者の見解すなわち他学派の見解）と対比されていることから分かるように、ジャヤンタ自身の独自の見解というよりは、ニヤーヤ学派自身の見解（自派の見解）という意味で取るのが適切である<sup>9</sup>。

<i>nijadarśana</i>	<i>paramata</i>
1. ニヤーヤ学派自身の見解	他学派の見解
2. ジャヤンタ自身の独自見解	ニヤーヤ内外の他者の見解

すなわち、ニヤーヤ学派自身の見解について過度に詳しく取り上げていないという意味となるはずである。『ニヤーヤ・カリカ』という小作品は、『ニヤーヤ・ストラ』に説かれる 16 項目および下位の項目についての極めて簡潔な綱要書という形式を取っている。実際、この小品の中では、ニヤーヤ学派の項目定義の簡潔な説明に力が注がれている。大著である『ニヤーヤ・マンジャリー』と対比するとき、『ニヤーヤ・カリカ』には、他学派説批判のないことがまず目に付く。また、自派の説についても枝葉に立ち入った議論は見られない。したがって自派の項目定義を簡潔に説明し、かつ、他学派との議論には踏み込まないという性格規定が最もよく当てはまる。つまり、自派の説に関しては過度に詳しそう、かつ、他学派説の排斥には立ち入らないという性格規定である。*vistara*, *atiprasaṅga*, *prasaktānuprasakta* などと呼ばれる詳説、派生的議論、傍論を省いているのである。

逆に「自身の見解」がジャヤンタ自身の見解を指すとするならば、自分自身のユニークな見解を優先させていないという意味になることも考えられるだろうが、*paramata*との対比バランスや『ニヤーヤ・カリカ』の実際の性格を勘案すると、その可能性は低い。実際のところジャヤンタは、彼独自の見解である「全てのアーガマは正しい認識の手段である」(sarvāgamaprāmāṇya) という考え方を、『ニヤーヤ・カリカ』という小品の中にもそれとなく挿入している<sup>10</sup>。

<sup>9</sup> Marui 2008 も、ニヤーヤ学派自身の見解という意味で理解している。

<sup>10</sup> また「自分自身の見解については過度に詳しくは説かなかつた」あるいは「優先させなかつた」という趣旨ならば、自分自身の見解がニヤーヤ学派の伝統的理解と食い違っていることを公に宣言してしまうことになる。それはさすがに論書の体裁として不適切である。

**aprabhāvitani jadarśanam ... kathitam**

自派の見解を過度に生じさせる（詳述する）ことなく……説かれた

結局のところ、この **aprabhāvitani jadarśanam** の解釈は、**apratānitasvamatabhedam**（ニヤーヤ学派自身の見解の相違について詳しく展開していない）の意味に近くなる。すると、次のように推測することが可能である。すなわち、この異読は、もともとは、**aprabhāvitani jadarśanam** の言い換えとしてマージンに書かれていたものだったのかもしれない、と。すなわち、**aprabhāvitani jadarśanam** は一見して意味が明らかでないので、その解釈として、**apratānitasvamatabhedam** がマージンに書かれていたのが、どこかの段階で本文に混入して、との表現と入れ替わってしまったという可能性である。これは十分に考えられる。そして、本文とマージンの混交形として、**aprabhāvita-svamatabhedam** という表現と、**apratānita-nijadarśanam** という表現が成立したということは十分にありうる。すなわち、マージンに **apratānitasvamatabhedam** を持っていた Ms.X を想定することで、次のような展開過程を考えられる。以下、関係が明らかとなるよう、B (**aprabhāvita**), N (**nijadarśanam**), T (**apratānita**), S (**svamatabhedam**) の略号を用いる。写本のうち、Ms.1 と Ms.3 はシャーラダー写本であり、Ms.2 と Ms.4 はデーヴァナーガリー（ただしいずれもカシミール・デーヴァナーガリー）写本である。カシミール伝本ということで特に重要なシャーラダー写本については太字強調で記しておく。（Ms.5 の文字は不明である。）

BN (Ms.2, **Ms.3**)

↓

BN + TS (Ms.X)

↓

BS (Ms.4) TN (Ms.5) TS (**Ms.1**)

まず、BN という表現がオリジナルとしてあった。Ms.2 と Ms.3 に見られる読みである。次に Ms.X (シャーラダー写本) のマージンに、TS という解釈が書き込まれた。これにより、BN と TS という表現が併記されることになった。次の段階で、様々な混交が起こる。すなわち、Ms.4 は BS, Ms.5 は TN, そして、Ms.1 はマージンにあった TS を本文として採用した。以上が考えられる一つのシナリオである。

しかし、問題は、ジャヤンタがはたして、**aprabhāvita** という聞き慣れない表現を唐突に用いたかどうかということである。c の意味で **aprabhāvita** を取るとき、「ニヤーヤ学派自

身の見解が過度に生じさせられていない、増やされてない」(prakarṣeṇa bhāvita) という表現を、「過度に繰り広げられていない」という意味で取るには、少し距離がありすぎるようと思われる。しかし、だからこそ、aprabhāvita という分かりにくい表現が apratānita という分かりやすい表現に変更されたのだという説明は十分に成り立つ。また、対比される paramata に関して、akṛtāparamatākṣepam (他学派説排斥が為されることなく) とあるのも助けになる。ākṣepam karoti (dūṣayati)との対比から、bhāvayati の意味は sādhayati や pratipādayati 等の意味で理解すべきことが導かれるからである。

自説詳述なし	他説排除なし
aprabhāvita	akṛta...ākṣepam
nijadarśanam	Paramata

### 2.2.2. 可能性 2 を支える議論

逆に、apratānitanijadarśanam がオリジナルとして存在していた場合、意味は明らかである。prakarṣeṇa tānitam nijadarśanam yathā となるであろうから、「ニヤーヤ自身の見解を過度に繰り広げることなく」となるはずである。では、なぜ、分かりやすい apratānita から aprabhāvita という分かりにくい表現が登場してきたのか。一つの可能性として、次の説明を考えられる。

TN (Ms.Z)

↓

TN (Ms.5) BS (Ms.4) BN (Ms.2, Ms.3) TS (Ms.1)

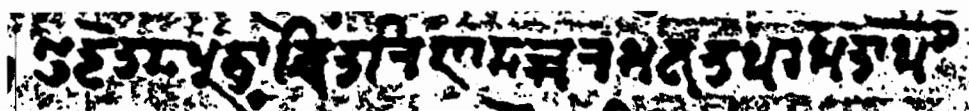
シャーラダー文字において、オリジナルの apratānita が aprabhāvita と読み間違えられた、と。すなわち、tā→bhā と ni→vi というように、それぞれ交替したという見方である<sup>11</sup>。この場合、TN (Ms.5)のもとになった TN (Ms.Z) というシャーラダー写本を想定することになる。そして次の段階で、nijadarśanam の具体的な内容を示す解釈として svamatabhedam という読みが、マージンから登場して本文に混入したことになる。しかし、apratānita→aprabhāvita という変化では、たとえ文字が近かったにしても、なぜ、意味の分

<sup>11</sup> 丸井 2014:380:「ちなみに“t”と“bh”、ならびに“n”と“v”は、シャーラダー文字では類似しており、読み間違いが起こりやすい。この読みの交替はシャーラダー文字写本の段階で生じたと考えられる。」

かりにくいものにわざわざ読み間違ったのかの説明が付きにくい。通常、読み間違いをするときは、意味の明瞭な簡単な読みの方へと引き寄せられるものだからである。つまり、意味の明瞭な *apratānita* が、わざわざ意味不明瞭な *aprabhāvita* に読み間違われる可能性は低いのである。シャーラダー写本を残したカシミールの学問伝統の質の高さも考慮すると、Ms.3 のシャーラダー写本やその先祖が、ランダムに読み間違ったということは考えにくい。言い換えれば、優秀なパンディットが明確な意図をもって *pratānita* を *prabhāvita* に入れ替えたとは考えにくいのである。また後で見るように、Ms.1 や Ms.3 というシャーラダー写本における *tā/bhā* と *ni/vi* はそれぞれ違いが明瞭である。文字が似ているために無意識に読み間違ったという可能性は低い。

### 2.2.3. *aprabhāvitaniṣadaraśanam* の採用

さて、以上、二つのシナリオのうち、BN+TS という段階（Ms.X）を立てる前者のシナリオでは、その後に様々な混交のタイプが出てくるのを一気に説明できる。すなわち、分かりにくい *aprabhāvitaniṣadaraśanam* の説明として *apratānitasvamatabhedam* が登場し、それが全体あるいは一部をもって本文に紛れ込むようになり、複数のヴァリアントを生み出した、と想定できる。いっぽう、*apratānitanijadarśanam* をオリジナルと想定する後者のシナリオでは、シャーラダーの読み間違い・転写間違いとして *aprabhāvita* という読みが出現し、その後、*nijadarśanam* の部分に代入可能な説明句として、*svamatabhedam* という表現が登場したと考えることになる。しかし、シャーラダー文字において *apratānita* から *aprabhāvita* への転写間違いは、本当に上で想定したように起こりうるものなのだろうか。まず、シャーラダー写本の Ms.3 は、明らかに *aprabhāvita* と書いている。しかも、*bhā/tā* と *vi/ni* は、明瞭に区別されている。この写本を見る限り、文字の混同は考えにくい。（シャーラダーに慣れない読者も多いだろうから対応を明らかにするために音節毎に区切って表記しておく。）



Ms.3: i tye ta da pra bhā vi ta ni ja da rśa na ma kṛ ta pa ra ma tā pe

事情は、*apratānita* と記す Ms.2 でも同様である。ここでも、*bhā/tā* と *vi/ni* の混同は、文字の区別上考えにくい。（括弧内の *ta da* は行の上に書き込まれた訂正後のものである。）

Ms.2: si ddhiṁ la bha te i tye (ta da) pra tā ni ta sva ma ta bhe da ma pa kṛ ta pa

以上の二例からすると、元となった写本においても文字が近似していた可能性は低いだろう。

念のため、デーヴァナーガリー写本についても確認しておく。Ms.2 と Ms.4 は、カシミールに特有のデーヴァナーガリーである<sup>12</sup>。(多くの読者にとりデーヴァナーガリーは親しみがあるであろうから、分節は通常のスタイルに直した。)

Ms.2: ity etad aprabhāvitani jadarśanam akṛtāparamatāpekṣam |

Ms.4: ity aprabhāvitavamatabhedam akṛtāpāra

以上から筆者としては、aprabhāvitani jadarśanam→apratānitani jadarśanam という推移の可能性 1 を採用したい。つまり、Ms.2（カシミール・デーヴァナーガリー）と Ms.3（シャーラダー）の読みを元の読みとして採用する。変化の過程は上で説明したとおりである。いっぽう、単なる読み間違いを想定する可能性 2 の蓋然性は低いと言わざるを得ない。

まとめ直すと次のようになる。ジャヤンタは、16 項目の本質 (śoḍaśapadārthatattvam) を語る (kathitam) に際して、他学派の見解の排斥を為さず (\*akṛtaḥ paramatākṣepo yathā)，同時に、自学派の見解を過度に生じさせなかつた (\*aprabhāvitam nijadarśanam yathā)，すなわち、過度に説明することをしなかつた。この対比を考えると、ここでの bhāvita (生じさせられた) は ākṣepaṇī kṛ (排斥する、論難する) の対義語であり、それに prakarṣena

<sup>12</sup> 筆者が校訂本において使用した L<sub>1</sub> と R<sub>1</sub> (いずれも通常のデーヴァナーガリー文字) のうち、R<sub>1</sub> は ity etad aprabhāvitani jadarśanam と読む。L<sub>1</sub> は黄色での修正やマージンでの訂正もあり甚だしく混乱している。マージンを度外視し、さらに、黄色部分の背後を透視しながら読むと、本文部分は恐らく ityam(pra)bhāvita(sva)matakam と読める。ta ka (間に若干のスペース) の部分は上書きしている様に見える。シャーラダー文字の G<sub>1</sub> は残念ながら結部を欠いている。

(際だって) の意味で *pra* を付したと考えるのが適当である。このように考えると、用例が見られない *aprabhāvita* も決して唐突な表現とは思われない。同じ文章内にある *akṛta* ... *ākṣepam* から十分に解釈可能な表現だからである。しかし分かりにくい表現であることに変わりはない。そこで、或る段階でパンディットが、「自派の見解を過度に生じさせてない」というジャヤンタの意図するところを正しく捉えて、「自派内部の見解の相違を過度に詳しく繰り広げていない」(*apratānitasvamatabhedam*) という解釈を書き加えたと思われる。そしてこのノートが本文に混入して様々なヴァリアントを生み出す原因となった。

なお、ジャヤンタが深入りして詳述するとき、あるいは、その詳述を避けようとするとき、その内容は、「自派内部の異説」に限られるわけではない。当の論題に関連する派生的な傍論も含む。例えば『ニヤーヤ・マンジャリー』には次の用例がある。

NM II 259.4–6: *yat tu śiṣṭānām api pramāditvam upavarṇitam “kila purāṇair munibhir api bahubhir apaśabdāḥ prayuktāḥ” iti, tatrābhīyuktas tadapanayanamārgaḥ pradarśita eva. sa tu granthavistaratrāśād iha na pratanyate.*

いっぽう識者達もミスをすることが「古の多くの聖者も誤った語形を用いていたではないか」と説かれていたが、それについては専門家達が、それ（ミスをする者であること）を取り除くための方途を既に示している。それについては、著述が詳細になるのを恐るので、ここで繰り広げることはしない。

つまり、「自派内部の見解の相違」(*svamatabhedam*) というのは、あくまでも、詳述内容の一例に過ぎないのである。パンディットが、一例として詳述内容を具体的に示したと考えられる。

### 2.3. 異読考察のまとめ

以上の議論を今一度整理すると、次のようになる。まず、*svamatabhedam* という読みは韻律上、排除される。すなわち、Dezső 2004 の *aprabhāvitasvamatabhedam* も、Marui 2008 の *apratānitasvamatabhedam* のいずれの可能性も排斥される。残った *nijadarśanam* についての二つの可能性のうち、上の考察で見たとおり、*aprabhāvita* がオリジナルである蓋然性が高い。

	- <i>nijadarśanam</i>	- <i>svamatabhedam</i>
<i>aprabhāvita-</i>	Ms.2 & Ms.3	Ms.4 (破格)
<i>apratānita-</i>	Ms.5	Ms.1 (破格)

筆者の採用したテクストを和訳と共に示すと以下のようになる。

ity etad aprabhāvitani jadarśanam akṛtāparamatākṣepam/  
śoḍaśapadārthatattvam bālavyutpattaye kathitam//

と以上、[ニヤーヤ学派] 自身の見解を過度に〔詳しく〕説くことなく、他〔学派〕の見解の排斥を為すことなく、16項目の本質が初学者の習得のために説かれた。

結局のところ、Marui 2008 は、分かりやすい言い換え表現である TS をオリジナルとして採用したことになる<sup>13</sup>。しかし、既に述べたように、TS がオリジナルである可能性は、韻律の関係から否定されている。つまり、TS→BN の可能性は最初から存在しない。また今仮に韻律を考慮の外に置いたとしても、BN と TS とを比べた場合、BN→TS は自然であるが、TS→BN は自然ではない。なぜなら、一見して意味が取りにくく BN の解釈として TS という言い換えは考えられるが、既にそれ自身として意味が明瞭である TS の解釈として、分かりにくく BN を挿入することは考えにくいからである。Marui 2008 は、形式の上から言えば韻律を考慮せず、また、内容の上から言えば、より困難な読み (lectio difficilior) の可能性を十分に考慮せず、内容上分かりやすい読みに引きつけられたということになる。写本の異読を扱う場合に必要な作業として、どうしてこれらの異読が出てきたのかという背景を考えることは重要である<sup>14</sup>。実際、丸井 2014:380 は、svamatabhedam の読みを選択するのを妥当と結論づけた後、丸井 2014:380, n.9において次のように記している。

ただし、それならばどうして“svamatabhedam”の読みから “nijadarśanam”という大きく異なる読みに移り変わったのかという問題が残る。これをうまく説明できる理由は、にわかには思い当たらない。

Marui 2008 および日本語版の丸井 2014（特に第 4 章第 1 節 2.3 の「終結部」）において問題はいまだ解決していなかったのである。

<sup>13</sup> 丸井 2014:380:「このように“apratañita”の読みのほうが、“aprabhāvita”より、意味のうえでも、NM の用例との対応のうえでも適合する。」

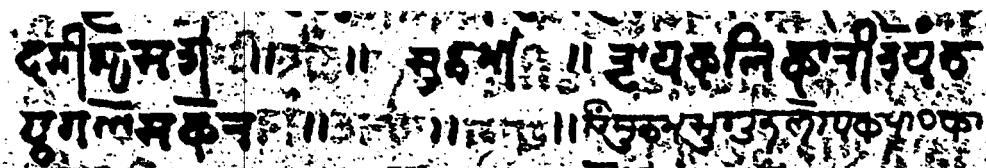
<sup>14</sup> 丸井 2014:380 は、svamatabhedam の読みを選択するのを妥当と結論づけた後、丸井 2014:380, n.9において次のように記している。「ただし、それならばどうして“svamatabhedam”的読みから “nijadarśanam”という大きく異なる読みに移り変わったのかという問題が残る。これをうまく説明できる理由は、にわかには思い当たらない。」

### 3. 写本の結部：シュローカと奥書

上では触れなかったが、アーリヤー詩節には他にも異読の問題がある。Ms.3 に見られたように、ākṣepam は āpekṣam などと混同されている。この手の混同は容易に想像がつく。いっぽう、最終詩節であるシュローカについては、このような問題は見られず、意外なほどに写本の読みが一致する。つまり、有意な異読が見られない<sup>15</sup>。ジャーのテクストのままで良いのである。このことは、最終詩節の後にある写本の結語（奥書）に異読が多く見られることと対照的である。

#### 3.1. 奥書の検討

例えば Ms.3 は、次のように終わる。（om 以下は同一写本に書かれた別のテクストの冒頭に置かれた帰敬の文句である。）



Ms.3: rya dī dṝ śa t || ś u bha m || nyā ya ka li kā nī te yam̄ bha  
tta ga ne śa ke na || ||

nyāyakalikā nīteyam̄ bhaṭṭaganeśakena という最後の一文は興味深い。ここには nītā という表現が見られる。通常であれば pranīta は、likhita と対比的に用いられて、著者が「著した」と書写生が「書いた」というように区別して用いられる。ではここで nītā も pranīta と同じと解釈して「バッタガネーシャカが著した」という意味に取るべきなのだろうか<sup>16</sup>。しかし、その解決法は適切ではないと考える。まず、この直前のシュローカに「ジャヤンタが示した」とあるのだから、著者がジャヤンタであることは明らかである。したがって、ここでの nītā は「著した」とは別の意味で取るしかない。どうしても「著した」の意味で

<sup>15</sup> Dezső 2004 が報告するように、ajāta に対して Ms.4 に ajñāta という異読が見られる。ここは問題なく ajāta が正しい。

<sup>16</sup> New Catalogus Catalogorum の Nyāyakalikā の見出しの下に “Nyāyakalikā by Gaṇeśa Bhaṭṭa” と “Nyāyakalikā or Śoḍaśapadārthatattva. ny. by Jayanta Bhaṭṭa” という二種類が挙げられていることについては丸井 2014:375 を参照。丸井は「また前者の Nyāyakalikā の著者として “Gaṇeśa Bhaṭṭa” の名が挙げられているが、ことによるとコロフォンを誤読した可能性があり、実際にはこれも “Jayanta Bhaṭṭa” の NKali の写本かもしれない。」とコメントしている。

取りたいならば、ガネーシャカをジャヤンタの異名と解釈することになるだろうが、それは特に根拠のないことがった見方である。ジャヤンタの同義語やエピテットとしてガネーシャカ（あるいはガネーシャ）は一般的ではないからである。したがって *nītā* を「持ってきた」「将来した」という語源的な意味で取るというのが最もましな解決方法である。すなわち、バッタガネーシャカがこの写本を（書写するなりして）持ってきたという意味である<sup>17</sup>。同じ情報は Ms.2 にも見られる。

त्यायकलिकानीतेप्रभद्वगणोशकोन ॥ शुभमस्त ॥ कत्यानमस्त ॥ गोत्सत् ॥

Ms.2: nyāyakalikā nīteyam bhaṭṭagaṇeśakena|| śubham astu|| kalyānam astu|| om tat sat||

Ms.2 は、 Ms.3 あるいはその同系を、そのまま写したと考えられる。いっぽう、 Ms.1 は次のようである。

भग्नुयं उद्यकलिक् ॥ ॥  
॥ मुहम्मदचरणार्थः ॥ ॥

Ms. 1: sa mā pte yam̄ nyā ya ka li kā ||  
|| śu bha ma stu sa rva ja ga ta h ||

念のため、Ms.4 も引いておく。

मियात्तसोसम् व्याप्त्यक्तिकामादेशयेन पर्यंते दृष्टात् समाप्तेयेना  
यदलिका क्षतिरियं महजयेन स्य शुभम् संवत् ८५४५ चैत्रशुक्लीमल

Ms.4: bhivyaktasaurabham nyāyasya kalikāmātram jayaṁtaḥ paryadīdṛśat samāpteyam nyā  
yakalikā krtir iyam bhattajayamtasya śubham samvat 1879 caitraśūḍīmala

以上のばらつき具合からも、この奥書が写本の書写生によるものであり、テクストに属するものでないことは明らかである<sup>18</sup>。

<sup>17</sup> 「ジャヤンタが見せてくれた・示した」のをバッタ・ガネーシャカが書き記したという意味であれば likhita 等を用いるべきであろう。「著した」(pranīta) の意味での nīta は不適当である。

<sup>18</sup> 丸井 1996:388(14)は「前述のNKaliの奥書を兼ねた末尾の偈」と述べ、「奥書」という表現を、本文に対しても用いているが、本稿では通常の用例に従い、著者自身の結語ではなく、書写生の手になる結語部分を「奥書」として指すこととする。

### 3.2. シュローカの検討

対比的に、直前のシュローカには、*ajāta/ajñāta* を除けば、有意な異読が見られない (Mss.1-4 の四写本)。したがって、このシュローカがテクスト自体に属することを疑う根拠は特に存在しない。すなわち、「ジャヤンタが示した」という文句を含むシュローカは『ニヤーヤ・カリカー』の著者自身の手になるものであって、後から書写生によって挿入されたものではないし、そのことをうかがわせるような状況証拠は、少なくとも写本には何もない。ある。

### 3.3. 二詩節の原形

以上から、ジャー校訂本の1-4行目にあたる結部の二詩節は次のように確定したことになる（括弧内は韻律名）。

ity etad aprabhāvitanijadarśanam akṛtaparamatākṣepam/  
śoḍaśapadārthatattvam bālavyutpattaye kathitam// (Āryā)  
ajātarasaniṣyandam anabhihyaktaṣaurabham/  
nyāyasya kalikāmātram jayantah paryadīdrśat// (Anuṣṭubh)

## 4. 結論

*Nyāyakalikā* 結部の1~4行目、その内の1~2行目はアーリヤー詩節であり、問題部分は、*aprabhāvitanijadarśanam* という読みがオリジナルと考えられる。いずれも書写生による奥書ではなく、著作自体に属す本文である。すなわち、「ニヤーヤ学のほんの薔に過ぎない *Nyāyakalikā* を Jayanta が示した」とある4行目で著者名・著作名が明らかにされる著者 Jayanta 自身が著した詩節である。

## 略号表および参照文献

*Āgamadambara*

ĀD        *Much Ado About Religion by Bhāṭṭa Jayanta.* Ed. Csaba Dezső. New York University Press and the JJC Foundation, 2005.

*Nyāyakalikā*

NKali      *The Nyāyakalikā of Jayanta.* Ed. Ganganath Jha. Princess of Wales Sarasvati Bhavana Texts, No. 17. Benares, 1925.

*Nyāyamañjarī* (=NM)

- M *Nyāyamañjarī of Jayantabhaṭṭa with Tippaṇī — Nyāyasaurabha by the Editor.* Ed. K.S. Varadācārya. 2 vols. Mysore: Oriental Research Institute, 1969, 1983.
- V *The Nyāyamañjarī of Jayanta Bhaṭṭa.* 2 parts. Ed. Gaṅgādhara Śāstrī Tailaṅga. Vizianagaram Sanskrit Series, No. 10. Benares: E.J. Lazarus & Co., 1895, 1896.

*Vādanyāya*

- VN *Dharmakirtis Vādanyāya.* Teil I. Ed. M.T. MUCH. Wien, 1991.

*Vākyapadīya*

- VP *Bhartṛharis Vākyapadīya.* Ed. Wilhelm Rau. Wiesbaden: Komissionsverlag Franz Steiner GMBH, 1977.

Dezső, Csaba

- 2004 An extra Introduction to *Much Ado About Religion by Bhatta Jayanta*, New York University Press JJC Foundation. Download from [www.claysanskritlibrary.org/excerpts/CSLMuchAdoIntro.pdf.zip](http://www.claysanskritlibrary.org/excerpts/CSLMuchAdoIntro.pdf.zip). (A part of PhD diss. submitted to Oxford University in 2004.)

Kataoka, Kei (片岡 啓)

- 2003 “Critical Edition of the *Vijñānādvaitavāda* Section of Bhaṭṭa Jayanta's *Nyāyamañjarī*.” 『東洋文化研究所紀要』144, 318(115)–278(155).
- 2013 “A Critical Edition of Bhaṭṭa Jayanta's *Nyāyakalikā* (Part 1).” 『東洋文化研究所紀要』163, 236(1)–184(53).

Marui, Hiroshi (丸井 浩)

- 1996 「Jayanta Bhaṭṭa の著作をめぐる諸問題」『印度哲学仏教学』11:1-20.
- 2000 “Some Remarks on Jayanta's Writings: Is *Nyāyakalikā* his Authentic Work?” In: *The Way to Liberation. Indological Studies in Japan*, ed. Sengaku Mayeda, Delhi: Manohar Publishers, 91–106.
- 2008 “On the Authorship of the *Nyāyakalikā* Again.” *Journal of Indian and Buddhist Studies*, 56-3, 1063(27)–1071(35).
- 2014 『ジャヤンタ研究』, 東京：山喜房佛書林.